

パラ言語スキルに焦点化した話し方個別学習教材の評価

平野 美保*・柴田 好章**

1. はじめに

実社会においてコミュニケーション能力の重要性が認識されて久しい。コミュニケーション能力の中でも、とりわけ音声行動は、話の聞き取りやすさや印象の良さに関連が深い。そのため就職活動を目前に控えている大学生がパラ言語スキルを身につけることは、音声行動の改善につながり極めて重要である。

本研究におけるパラ言語は、藤崎(1993)の分類に従っている。藤崎によると、パラ言語は、発話意図、発話様式、感情の一部をさし、話者の意思で制御できる音声情報をさしている。本研究では、発話の意図(発話速度、間等)や話者の心的態度に関するもの(明るさ・暗さ等の声のトーン、語尾のイントネーション等)をパラ言語と呼び、その技能をパラ言語スキルとする。なおパラ言語スキルとは、筆者の造語である。

パラ言語は、話のわかりやすさ(例えば、杉藤1989, 内田2005)や話者の印象(例えば、井上1993, 洪1993)に関連し、話者の意思で制御できる。しかし、通常のコミュニケーションでは、パラ言語に意識を向けることは少ない。そのため話者の意思で制御できるパラ言語を意識し改善することによって、肯定的な効果が期待される。そこで本研究ではパラ言語スキルに焦点化する。

このパラ言語スキルの改善については、集合研修によって支援することで肯定的変化がみられることが確認されている(平野2010a)。しかし集合研修など人前での演習に抵抗感を示す学習者がいる(平野2010b)。アナウンサー志望者だけでなく一般にも使用可能な自学自習の視聴覚教材は存在するが(例えば、NHK出版編2005)、大学生と社会人とはパラ言語に関する認識面と行動面に違いがあり(平野2007)、大学生に適したパラ言語スキル習得のためのプログラム開発の必要性が指摘されている(平野2012)。

そこで本研究では、筆者が開発した話し方個別学習教材(以下、教材とする)を大学生に提供し、教材の使用感や学習効果について明らかにすることを通して、

教材を評価することを目的とする。なお、本研究の教材は、自分のペースで学習することによるドロップアウトを防ぐため、即効果が見込まれるという特徴を有している。

2. 方法

2.1. 個別学習教材の開発指針

大学生に対するパラ言語スキルに焦点化した集合研修では動機づけが重要であること(平野2007)や、学習の支援をしなければ、既知であっても未修得の内容について学習者は漠然とした意識のままであることが推察された(平野2010a)。また個別学習において懸念されることは、吉本他(2009)の大学生に対するeラーニングにおけるドロップアウト誘発にみられるとおり、授業量の多さや学生への負荷が要因として指摘されている。そのため個別学習であっても、初心者が、教材を通して動機づけられ、深い理解につながり、取り組みやすく、すぐに効果があらわれることを教材設計の指針とした。

2.2. 教材の内容・方法

教材(約12分)の内容は平野(2010a, 2000b)の集合研修を参考に基礎的な内容を選択し制作した。タイトルを「インターンシップ前に身につけておきたい話し方<声の調子>」とし、DVDによって視聴できるようにした。内容と方法は、表1の通りで、教材では演習として、2回、学習者自身で録音して、自己の音声行動を確認する箇所を設けている。

2.3. 実施の方法

国立A大学の「インターンシップ事前講義」の授業(週1回90分, 15回, 3年生対象)で、話し方の中でも特に音声行動の改善を支援するために、受講者全員に授業時間外にこの教材を視聴するよう課題とされた。事前に同意が得られた学習者を対象に音声のデータ収録とアンケートをそれぞれ2回実施した。1回目を第

*京都ノートルダム女子大学講師

**名古屋大学大学院教育発達科学研究科准教授

10回、2回目を第15回の授業後に実施した。なお教材は1回目の調査終了後から2回目の調査までに視聴するよう指示され、学習者はその間に各人でDVDを視聴した。音声のデータ収録については、平野(2010a, 2000b)と同様の職業場面を想定した文章(約150字)で、ひとりずつ別室で録音を行った。全データが得られた22名(男3名、女19名)を分析対象とした。

2.3. 評価の方法

音声の評価については、企業の社員研修の講師として従事する3名に、発音の明瞭さや話の間など8項目の評価観点に従って総合評価として1～5点による評価を依頼した。評価にあたっては、1回目と2回目の音声データをランダムに振り分け、評価者には1回目か2回目かわからないようにした。アンケートでは、1回目に話し方で重要なことについて自由に記述してもらい、また話し方に関する教育の希望について質問した。2回目のアンケートでは、教材の活用方法や印象についての質問と自由記述を行った。

3. 結果と考察

3.1.1. 教材視聴前の意識

教材視聴前のアンケートで話し方に関する教育の希望について質問したところ、図1のとおり、いずれも約8割が希望していた。すなわち、本研究参加者は、話し方に関する学習に対してもともと意欲が高いといえ、大学生は話し方に関する学習意欲が高いことが推察される。

表1 個別学習教材の内容と方法

1 導入 教材の説明と 動機づけ (文字と音声)	<ul style="list-style-type: none"> 教材の構成について 「既知」と「できる」こととは別であること 教材の活用方法(練習と録音について)
2 展開 改善ポイント と練習方法 (文字、音声、映像)	(1) 解説 <ul style="list-style-type: none"> 印象や話のわかりやすさ等の相違について 改善ポイントの確認 (2) 演習(練習、録音、音声行動の確認) <ul style="list-style-type: none"> 滑舌練習、強調、癖(語尾)、応用練習
3 まとめ 今後への動機 づけと復習 (文字と音声)	<ul style="list-style-type: none"> 音声行動の相違についての確認 ポイントの復習

3.1.2. 学習前の新規性

学習者が教材視聴前の1回目のアンケートにおいて、学習者は「ハキハキ話すこと」「間をうまくとること」など、パラ言語に関する内容について全員が記述していた。それらは妥当な回答であったことから大方理解していたことがわかる。また教材視聴後の2回目のアンケートにおいても「基本的な内容が多く、知っていることばかり」にみられるとおり、学習者にとって全体的に既知の内容であることがわかる。その点では、本研究で扱う教材の内容に新規性はなかったといえる。

3.1.3. 学習の有効性

それにもかかわらず2回目のアンケート(図2)の③～⑥において、7～8割強の学習者が「役立つ」と回答している。本教材では、「既知」と「できる」ことは別であることや、音声行動によって印象や話のわかりやすさに相違があることを教示している。また話者が直ちに改善できる内容で改善方法を説明している。そのため、学習者は「既知」であっても「できていなかった」と考えた教材のポイントについて意識していることが推察される。2回目のアンケートの自由記述でも同様の傾向がみられ、大きく4つの内容に分類できた。そのうちの3つが学習の有効性にかかわる既知の内容であるにもかかわらず「自己紹介だけの短い文章でこんなに印象が違うのかと驚いた」「ポイントを理解できる」「話の重要なポイントを意識して、ゆっくり明確に話すよう心がけよう」など「印象の違いの驚き」「ポイントの確認」、そして「行動の改善への意欲の向上」につながった点である。音声行動の重要性を認識していても、普段意識にのぼらないことが考えられるため、本教材の視聴はそれを再認識する機会になったことが推察される。

3.1.4. 教材への要望

教材視聴後のアンケートにみられた4つ目は「教材への要望」についてであった。本教材は、基礎的な内

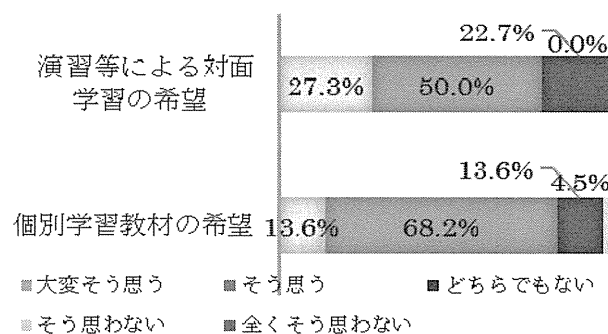


図1 話し方に関する学習の希望

容が中心であったため、「あまり知られていないようなポイントとか、コツとか、新規の知識につながる内容のことは遣いも含めた練習方法の提示などがあればいい」などの要望がみられた。この点からも話し方に関する学習への意欲が高いことがわかる。また図2のとおり、教材を視聴しながら声に出してみた研究参加者が多数みられた(①)一方で、録音にまで至らない傾向がみられた(②)。この点については、教材視聴後のアンケートにおいて「録音機器を貸してもらいたかった」や「教材の中ですぐに体験できるとよい」の記述の通り、貸し出しやフィードバックのための技術の導入などについて検討していく必要があるだろう。

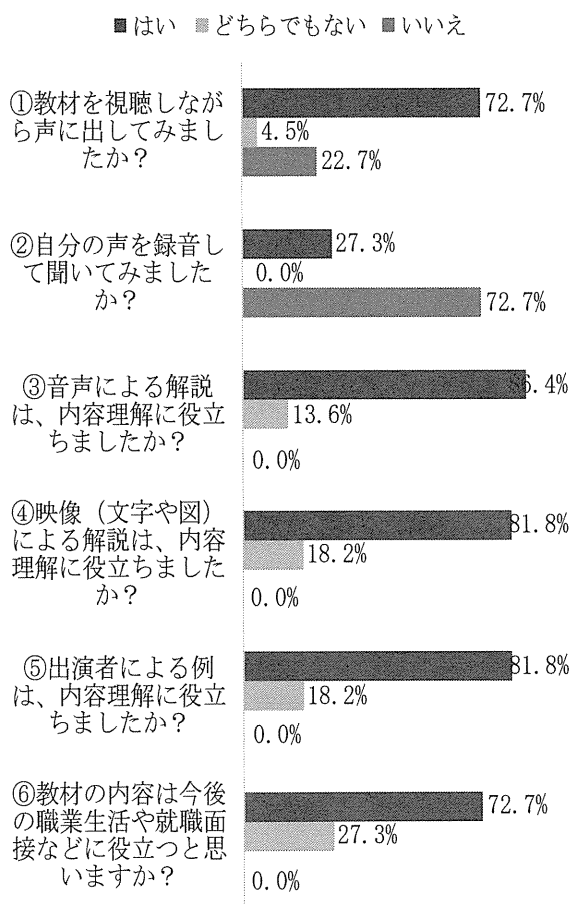


図2 教材視聴後のアンケート結果

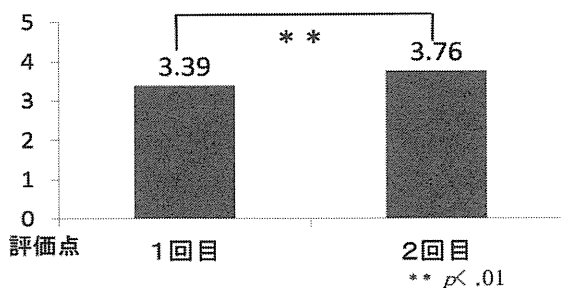


図3 音声評価の変化

3.2. 専門家評価

1回目の評価の点数は、平均3.39点で、2回目は平均3.76点であった。平均の差は0.37点で、音声評価の平均をt検定したところ1回目より2回目の方が有意に高かった($t(21) = 3.33, p < .01$)。3名の評価者の平均点において評価が下がった参加者は4名で、15名は評価が上がり、3名は変わらなかった。なお評価者3名の信頼性係数(クロンバックの α 係数)は、1回目の評価では0.77で、2回目は0.72であり、おおかた信頼できる評価であったといえる。すなわち行動面においても大方肯定的な変化がみられたことから、本教材のように基礎的かつ既知の内容であっても、パラ言語に関する学習は話のわかりやすさや印象において肯定的な効果をもたらすことが推察される。

3.3. 否定的な効果がみられた参加者

評価者の平均において4名に否定的な効果がみられた。4名中3名の自由記述に「緊張(中略)早口でいきいき話してしまう」など「緊張」の文字がみられた。残りの1名は「自分の話し方、声を客観的に判断するのは難しい」と述べている。音声を質的に検討した結果、前者の3名は教材のポイントについて改善しようとしているが、却って不自然さがみられた。すなわち教材を使って学習することによって、改善を試みるものの緊張感によって却って不自然に発話してしまったり、改善されたか自ら判断できず音声行動の改善にまで至らなかったりしたことが考えられる。本教材は、文字通り個別で学習するため、学習者自身で音声行動の変化を確認していく必要がある。本研究では、否定的に評価された学習者は少なかったものの、音声行動の学習には、研究参加者の記述にみられるとおり「自分の話し方、声を客観的に判断するのは難しい」側面がある。しかし、個別学習教材であってもフィードバックする方法などを検討し、学習者にとってより使いやすく、かつより行動改善につながるような内容・方法について検討していく必要があるだろう。

4. まとめ

パラ言語スキルに焦点化した話し方のための個別学習教材を大学生に提供し、その使用感や、教材使用前後におけるパラ言語に関する意識と行動の変化について検討することを通して教材を評価した。その結果、大学生は話し方に関する学習意欲が高いことが推察された。また本教材は、学習者にとって全体的に既知のことであったにもかかわらず、「印象の違いの再認識」

「ポイントの確認」「行動改善への意欲の向上」という効果がみられ、学習者にとって役立つ内容であったといえる。音声行動については約7割に肯定的な変化がみられた。すなわち、本教材の視聴によって、学習者はパラ言語に関する意識面や行動面が強化されるといえる。さらに、eラーニングにみられるドロップアウトが心配されたが、学習者の約7割が視聴の際に声に出したと回答している通り、本教材は学習者に受け入れられていたことがわかった。

今後の課題としては、パラ言語スキルに焦点化したものだけでなく、緊張感の緩和に関する支援など話し方に関する教材も含めて、eラーニングや情報端末を使い録音機能を統合的に活用した教材の開発をしていく必要がある。

なお本稿は、平野・柴田（2013）において発表した研究の分析を深め、その成果をまとめたものである。

謝辞

研究に参加いただいた受講生の皆さんと、調査にご協力いただいた方々に心から感謝申し上げます。

なお本研究の一部は科学研究費助成事業（基盤C）の補助を受けた。

参考文献

藤崎博也（1993）日本語の音調の生成モデルによる分析。国際化する日本語 話し言葉の科学と教育。クバプロ

平野美保（2007）大学生の音声に関する意識と行動—音声表現訓練の効果における社会人との比較を通して— 名古屋大学大学院教育発達科学研究科紀要（教育科学）54（2）：85-95

平野美保（2010a）パラ言語スキルに焦点化した音声行動学習プログラムの開発と評価—職業生活に向けたコミュニケーションスキル獲得の支援のために—。日本教育工学会論文誌 34（1）：23-33

平野美保（2010b）パラ言語スキルに焦点化した音声行動学習プログラムの指導法の検討—演習方法の相違による学習者の心理的状态と効果の比較—。名古屋大学大学院教育発達科学研究科紀要（教育科学）57（1）：67-77

平野美保（2012）パラ言語スキル育成のための音声行動学習プログラムの開発—大学生への試行結果に即して—。博士学位論文（名古屋大学）

平野美保・柴田好章（2013）パラ言語スキルに焦点化した個別学習教材の評価。日本教育工学会第29回大会講演論文集：485-486

NHK出版編（2005）CD-ROMブック NHKアナウンス実践トレーニング，NHK出版

井上史雄（1993）日本人の最近のイントネーション，国際化する日本語 話し言葉の科学と音声教育。クバプロ。

洪珉杓（1993）丁寧表現における日本語音声の丁寧さの研究。音声学会会報。204：13-30

杉藤美代子（1989）談話におけるポーズとイントネーション 講座日本語と日本語教育2 日本語の音声・音韻（上）明治書院 343-364

内田照久（2005）音声の発話速度と休止時間が話者の性格印象と自然なわかりやすさに与える影響。教育心理学研究。53：1-13

吉本弥生・奥野浩之・合田美子（2009）より効果的な学習支援のための事例研究 科目別ドロップアウト誘発機会に基づくメンタリング。大手前大学 CELL教育論集。1：39-44。

Evaluation of Self-Learning Material Focused on Paralanguage Skills

Miho Hirano and Yoshiaki Shibata

Abstract

The purpose of this study was to provide self-learning material that focused on paralanguage skill development. The study assessed the effects of the material on university students by using expert evaluations and pre- and post-questionnaires to determine if there were any changes in the participants' behavior or awareness.

It was presumed that university students would be eager to learn about speech. An analysis of the results showed that although the participants were already aware of most of the contents in this self-learning material, the material did affect the students' recognition of the difference of impression, confirmation of points, and motivation to improve behavior. In conclusion, this self-learning material appears to be useful for university students. Positive changes were also observed in vocal awareness and behavior.